

小林市文化財調査報告書第1集

みず おとし  
水 落 遺 跡

県営出の山地区園場整備事業に  
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1990

宮 崎 県

小林市教育委員会

水落遺跡正誤表

	誤	正
2頁 3行目	場)、太平	場)・太平
9頁20行目	黄橙色	黄橙色土層
9頁28行目	D-11	d-11
15頁 4行目	井の山地区	出の山地区
15頁11行目	住居後	住居跡
15頁30行目	境はっきりしない	境は、はっきりしない
16頁 6行目	338cm	38cm
20頁	豎穴住居実測図	B地区3号住居実測図
23頁 6行目	図6	図8

上記のとおり、訂正してお詫び申し上げます。

## 序

この報告は、平成元年度県営圃場整備事業に伴ない、西諸県農林振興局の委託を受けて、小林市の南部地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査をした記録であります。 平成元年9月から同年12月までの発掘調査の結果、弥生土器片4, 349個、石器994個、中世陶器片83個、鉄製品64個、玉5個、銅錢（寛永通宝）97枚、木片5個等数多くの遺物及び遺構が発見されました。

これらの貴重な遺物とともに、市史解明の資料となることは、ひいては郷土愛の機運を醸成することになり、誠に意義深いものがあります。学校教育、社会教育、或いは文化財保護のため広く活用をいただきたいと思います。

本事業の推進に、ご指導とご協力をいただきました宮崎県教育委員会文化課、西諸県農林振興局、出の山土地改良区等関係各位に対し深甚の謝意を表しますとともに、発掘作業に従事くださいました皆様に対しても、厚くお礼を申し上げます。

平成2年3月

小林市教育委員会

教育長 山口寅一郎

## 例　　言

- 1 本書は、小林市出の山地区の県営圃場整備事業に伴ない、平成元年度に実施した水落遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、小林市教育委員会が主体となり、県文化主任主事長津宗重（一次調査）・主事長友郁子（二次調査）が担当した。
- 3 調査組織は次の通りである。

**調査主体 小林市教育委員会**

教　育　長	山　口　寅一郎
社会教育課長	川　畠　正　一
同　係　長	黒　木　英　夫
同　係　員	上別府　　優

**特別調査員 長崎大学医学部教授 松　下　孝　幸**

調査員 県文化課 主任主事	長　津　宗　重（一次調査担当）
主　事	長　友　郁　子（二次調査担当）
主　査	宍　戸　　章
主　事	吉　本　正　典

- 4 本書の執筆は、黒木英夫・長津宗重・長友郁子が分担し、文責については目次に明記している。
- 5 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色粘による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

## 本文目次

第Ⅰ章 序説		
第1節 発掘調査に至る経過	黒木	1
第2節 小林市の歴史的環境	長津	1
第Ⅱ章 水落遺跡A地区の調査	長津	
第1節 発掘調査の概要		9
第2節 包含層の状態		9
第3節 中世の遺構と遺物		9
第4節 小結		10
第Ⅲ章 水落遺跡B地区の調査	長友	
第1節 調査区の設定と概要		15
第2節 層序		15
第3節 弥生時代の遺構と遺物		16
第4節 中世の遺構と遺物		16
第5節 近世の遺構と遺物		19
第6節 小結		23
第Ⅳ章 まとめ	長津	

## 挿図目次

第1図 小林市の遺跡分布図
第2図 水落遺跡A・B地区全体図
第3図 A地区遺構分布図
第4図 B地区基本層序
第5図 B地区遺構分布図
第6図 B地区3号住居実測図
第7図 B地区出土弥生土器実測図(1)

第8図 B地区出土弥生土器実測図(Ⅱ)

表 目 次

第1表 B地区出土弥生土器観察表

図 版 目 次

- 図版1 A地区遠景(西から)・A地区全景
- 図版2 A地区掘立柱建物群・A地区1号掘立柱建物
- 図版3 B地区全景・B地区3号住居
- 図版4 B地区近世墓群全景・縹刻土器出土状況

## 第Ⅰ章 序 説

### 第1節 発掘調査に至る経緯

宮崎県西諸県農林振興局では、昭和62年度から出の山地区圃場整備事業を実施している。平成元年度工事実施予定地内には遺跡は知られていなかったが、県文化課の分布調査で土器散布地等が確認された。また、隣接地に「夷守駅」の推定地が所在していたので、県文化課では昭和63年12月試掘調査を実施した。その結果、予定地内で弥生時代頃の遺跡が2ヶ所（水落遺跡、中島遺跡）所在することが確認された。なお「夷守駅」に関する遺構等は確認されていない。聞き取り調査では、細野小学校の北東の墓地内では墓地造成中、地下式横穴墓と推定される内面に朱を塗った空洞が発見されている。

そして、この工事予定地内で遺跡の所在が確認されたため、西諸県農林振興局、出の山土地改良区、県文化課、市教育委員会の4者で協議を行った結果、工事により包含層等が削平を受ける部分と道路部分は、発掘調査の措置を取ることになった。水落遺跡の発掘調査対象地は広範囲で調査期間に数か月を要することから、稲収穫後に調査着手したのでは工期に影響するため、一部畠の転作を行い調査期間を確保することになった。

発掘調査は、水落遺跡A地区を平成元年9月4日から10月30日まで県文化課主任主事長津宗重氏の担当で実施し、水落遺跡B地区は11月7日から12月27日まで県文化課主事長友郁子氏の担当で実施した。また、中島遺跡については道路部分のみを12月に実施した。

### 第2節 小林市内の歴史的環境

小林盆地は北の裏日向山地、東の諸県山地北西支脈、南の霧島火山、西の加久藤盆地に囲まれた凹地である。裏日向山地の南には加久藤火砕岩と溶結岩の丘陵地が広がり、霧島火山の北と東には溶岩流末端から形成された新・旧の扇状地が開析されて、下位及び中位の段丘が広がる。盆地内には石水川などの小河川が流れ、合流して岩瀬川となって東に流れている。盆地底の大部分はシラス台地とそれが浸食されて形成された段丘であり、最低位に氾濫原性低地がかなり広がる。<sup>(1)</sup>

水落遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する。

#### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、東勝りの野尻町の新村・高山遺跡でナイフ形石器、剥片・搔器が出土しているので近い将来当地でも確認されると思われる。<sup>(2)</sup>

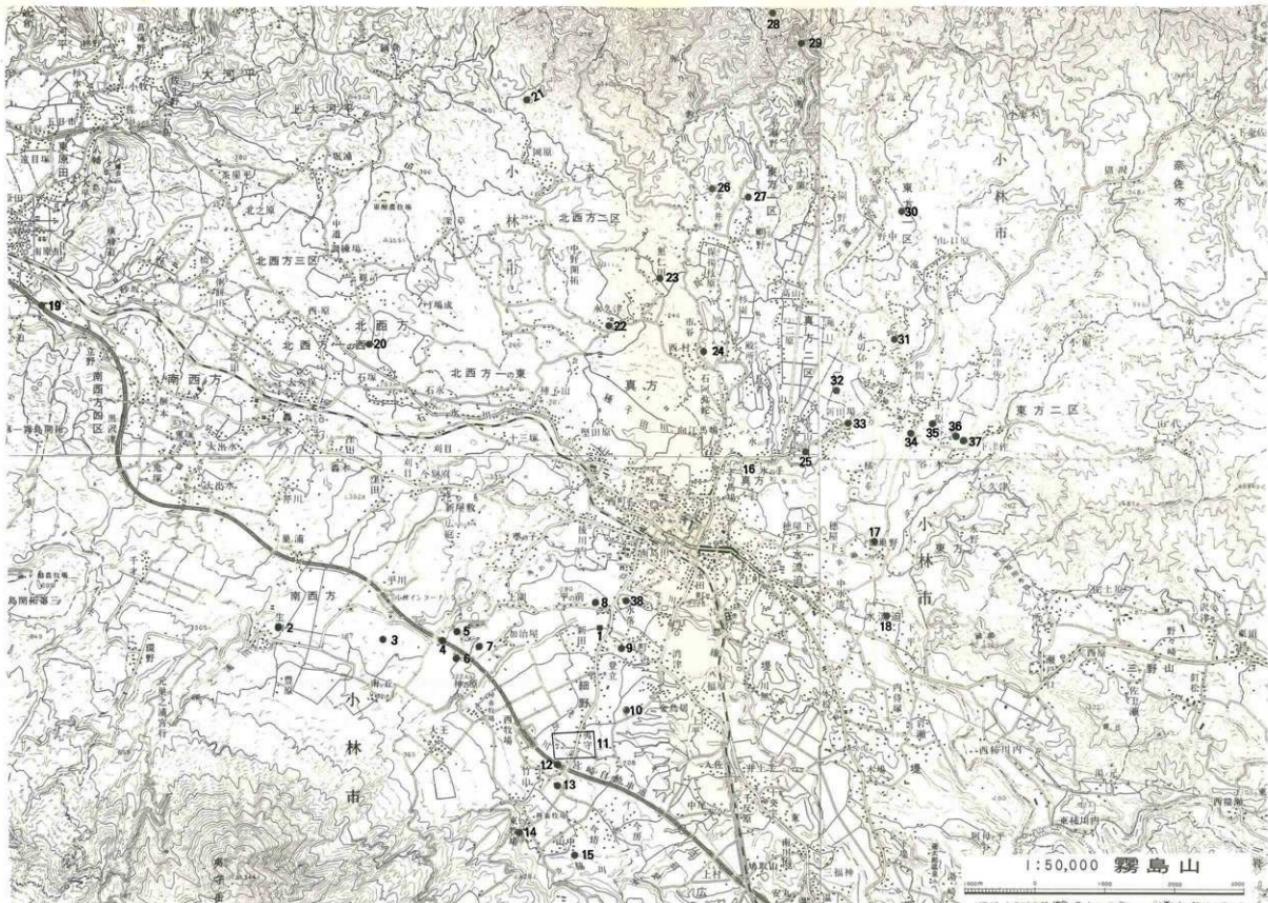
## 縄文時代

縄文時代早期の遺跡としては本田遺跡（大字東方字坂下）<sup>(3)</sup>・平木場遺跡（大字南西方字平木場）<sup>(4)</sup>、大平遺跡（大字北西方二区字大平）<sup>(5)</sup>・内木場遺跡（大字東方字集）<sup>(6)</sup>・上永久井野・城山などが知られている。本田遺跡は当市の北側の浜瀬川を東に臨む丘陵上に位置し、昭和41年に調査された結果、押型文（楕円・山形）土器<sup>(7)</sup>・前平式土器・塞ノ神式土器が出土したが、塞ノ神式土器の出土量は少ない。平木場遺跡は当市の南西のえびの市と境を接する平木場台地の南側に位置し、昭和47年に九州縦貫自動車道に伴って調査された結果、楕円押型文土器が出土している。大平遺跡では塞ノ神式土器が、内木場遺跡では楕円・山形押型文土器が表採されている。また黒仁田出土の磨製の環状石斧は注目される。しかし、集石遺構などのこの時期の遺構は当地域では検出されていない。

前期の遺跡としては、本田遺跡・平木場遺跡・新田場遺跡（大字貞方三区字新田場）などが知られている。本田遺跡は昭和41年の調査によって県内でも有数の前期の遺跡であることが明らかになり、曾畠式土器が出土すると併に住居の一部が確認された。前期の住居としては県内唯一であり、注目される。曾畠式土器はⅡ式とⅢ式が出土している。当遺跡の石器組成は石鐵・石斧・石槍であり、特に石鐵の割合が高い。石鐵の石材としてはチャートが多く使用されている。出土している黒縄石は姫島産や腰岳産のものではなく、「霧島産」である。当地域は立地的に「霧島産」の割合が非常に高いが、西方では日東産と姫島産が、出の山では日東産が表採されている。<sup>(8)</sup> 平木場遺跡で出土した曾畠式土器は刺突文や直線文で構成されたⅢ式である。当遺跡の石器組成は石鐵・石匙・磨製石斧などである。新田場遺跡でも曾畠式土器が表採されている。

1 水落遺跡	2 生駒遺跡	3 平川遺跡	4 駒乗毛B遺跡
5 葉訪台遺跡	6 駒乗毛A遺跡	7 出の山道路	8 前ノ原遺跡
9 新田遺跡	10 小林市横穴墓群	11 大守駅推定地	12 竹山遺跡
13 竹山南遺跡	14 東牧場遺跡	15 山中遺跡	16 三ツ山城跡
17 雲風野遺跡	18 ノ平地下式横穴墓群	19 平木場遺跡	20 尾中原地下式横穴墓群
21 大平遺跡	22 永久津遺跡	23 黒仁田遺跡	24 正対原古墳
25 堂山遺跡	26 永久井野遺跡	27 ひばり遺跡	28 赤松遺跡
29 本田遺跡	30 風呂ノ本遺跡	31 内木場遺跡	32 東二原地下式横穴墓群
33 新田場地下式横穴墓群	34 立山遺跡	35 上原遺跡	36 高津佐遺跡
37 集遺跡	38 城山地下式横穴墓群		

小林市内の遺跡地名表



第1図 遺跡分布図

中期の遺跡は県内では非常に稀薄であり、当地域でも確認されていない。

後期の遺跡としては中山前遺跡<sup>(10)</sup>（大字細野字中山ノ前）・駒栗毛遺跡<sup>(11)</sup>（大字細野字駒栗毛）・本田遺跡・立山遺跡（大字東方二区字立山）・集遺跡（大字東方字集）などが知られている。中山前遺跡は舌状丘陵の北斜面に位置し、昭和38年の調査の結果、市来式土器・磨石などが出土した。駒栗毛遺跡は霧島連山夷守岳の北東の丘陵（標高288～300m）に位置し、昭和47年に九州縦貫自動車道に伴って調査された結果、第IV層から岩崎上層式土器・市来式土器が出土し、出水式土器類似した土器も出土している。当遺跡では市来式土器と岩崎上層式土器の上下関係を層位によって確認している。本田遺跡では西平式土器が出土している。立山遺跡・集遺跡では市来式土器が出土している。

### 弥生時代

牛駒出土の両端えぐりの方形石廻丁・尾中原出土の長頸壺、細野出土の重弧文土器が特に知られているが、調査はあまり行われていない。平松遺跡は平成元年に圃場整備事業に伴なって調査された結果、後期の土器が出土した。今回の水落遺跡の調査によって後期後葉～末葉の7軒の住居が検出され、その中の3号住居はベッド状造構を有する円形プランである。また重弧文長頸壺が7号住居から出土しており注目される。

### 古墳時代

当地域には前方後円墳・円墳ではなく、地下式横穴墓と横穴墓がある。横穴墓としては小林市横穴墓（大字細野字真方）があるが、詳細は不明である。

地下式横穴墓としては下ノ平地下式横穴墓群（大字水流字下ノ平）・尾中原地下式横穴墓群（大字北西方字石塚尾中原）・新田場地下式横穴墓群（大字真方字松之元・新田場）・二原地下式横穴墓群（大字真方字二原）、城山地下式横穴墓群（大字細野字城山）などが調査されている。下ノ平地下式横穴墓群は大淀川の支流である岩瀬川の右岸台地に位置する。昭和56年に調査された下ノ平1号地下式横穴墓<sup>(12)</sup>は、羨門石閉塞の平天井片袖平入りで棚状施設を有するタイプであるが、玄室と竪坑の主軸がぶれており、右壁面には格子目状と束柱の線刻がある。3体の人骨と伴に棚状施設から剣2・刀子6・鉄鎌7が出土しており、6世紀前半に比定されている。昭和60年に調査された2号地下式横穴墓<sup>(13)</sup>は羨門石閉塞の片袖平入りの棚状施設から剣1・刀子6・鉄鎌6が出土した。

尾中原地下式横穴墓群は標高約280mの小高い台地の南斜面に位置する。昭和39年以前に数基の地下式横穴墓が発見され、朱玉・剣・刀・刀子・鉄鎌などが出土しているが、詳細は不明である。昭和39年に調査された地下式横穴墓は竪坑上部石閉塞の平入りで棚状施設を有するタイプであり、左右の壁面には束柱が浮彫りされている。玄室の床面と棚状施設から剣3・鉄鎌5が出土した。

新田場地下式横穴墓群は岩瀬川とその支流に挟まれた標高210～230mの二原台地の南端に位置する。現在までに10基以上発見されているが、昭和50年以前に発見された6基については詳細は不明である。松之元の2グループと新田場の1グループの計3グループに分かれ。出土品の中には双脚状鉄器があり注目される。昭和50年に調査された地下式横穴墓は羨門石閉塞の妻入りで棚状施設を有するタイプであり、2体の人骨と共に剣1・刀子1・鐵鎌3が出土している。昭和60年に鋼場整備事業に伴って調査された7基の地下式横穴墓は1号地下式横穴墓の堅坑上部石閉塞を除くと、その他は羨門石閉塞と羨門板閉塞の片袖平入りの棚状施設を有するタイプである。剣・刀子・鐵鎌・斧・錐・鍔先・鎌・釣針などが出土しており、5世紀後半～6世紀前半に比定される。

二原地下式横穴墓群は新田場地下式横穴墓群の北約800mに位置する。昭和60年に調査された1号地下式横穴墓は羨道石閉塞の両袖平入りのタイプで、床面から刀子2・鐵鎌4が出土した。また平成元年1月～2年2月に鋼場整備事業に伴って15基（2号～16号）が調査されているが羨道石閉塞の両袖平入りの棚状施設を有するタイプである。2号地下式横穴墓から直径5.0cmの珠文鏡が、8号地下式横穴から目輪が出土しており注目されるが、基本的には剣・刀・刀子・鐵鎌の組み合わせである。計21体の人骨が検出されており、11号地下式横穴墓の5体が最大の被葬者である。また二重周溝を有する直径約27m、高さ3.6mの円墳が確認されており、市内では初例であり注目される。

城山地下式横穴墓群は辻の堂川を北に臨む標高230mの小規模な台地に位置し、昭和14年以前に2基発見されているが、詳細は不明である

当地域の地下式横穴墓は羨門石閉塞の片袖平入りで棚状施設を有するタイプであり、棚状施設に剣・刀・鎌などの武器を副葬することに特徴があるが、須恵器・土師器などの上器が玄室内に副葬されることがない。また川内川上流のえびの市を中心には分布する堅坑上部石閉塞もわずかであるが見られる。

平木場遺跡では一辺440cmの規模の方形プランの住居の一部が検出されており、炉から土師器が、柱の西側から須恵器の壺が出上している。駒栗毛遺跡では長軸185cm、短軸150cm、深さ40cmの楕円形プランの土壙が検出され、土師器・須恵器が出土している。

## 歴史時代

『延喜式』によると日向国の駅馬は16駅あり、そのうちの夷守駅は大字細野字夷守に地名が残ることからこの地に比定されている。<sup>21)</sup>推定地は水落遺跡から南へ約1kmの地点である。

平安時代の遺跡として竹山遺跡（大字細野字竹山）・駒栗毛遺跡が知られている。竹山遺跡は南北に伸びる丘陵の南斜面に位置し、昭和47年に九州縦貫自動車道に伴って調査された結果

果、柱穴群が検出され、土師器の高台付きの椀・内黒土器・ヘラ切り底の壺・布痕土器などが出土した。駒糞毛遺跡でも布痕土器が出土している。

中世の山城としては三ツ山城（大字真方）・小林城・内木場城・野首城・岩牟礼城・宇賀城がある。<sup>29</sup> 三ツ山城は北原氏の居城であり、本丸・二の丸・大手口の跡が残っている。

今回の調査でまとまって43基も近世墓が検出されたのは、江戸時代終りの墓地の構造・変遷を考える点で注目される。

当地域の発掘調査はようやく端緒についたばかりであり、地域史を具体的に描きだせるまでには至っていない。今後の調査に期待することが大である。

#### 註

- (1) 経済企画庁総合開発局『土地分類図（宮崎県）』昭和49年
- (2) 日高孝治 「斬村遺跡・高山遺跡」『野尻町文化財調査報告書』第1集 野尻町教育委員会 昭和61年
- (3) 鈴木重治 「小林市木田遺跡の調査」『昭和41年度西日本史学会秋季学術大会発表要旨』『九州考古学』第32号所収 昭和42年  
鈴木重治 「木田遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』 宮崎県 平成元年
- (4) 安楽 勉 「平木場遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)宮崎県教育委員会 昭和48年
- (5) 文化庁 『全国遺跡地図（宮崎県）』 昭和43年
- (6) 宮崎県総合博物館『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』昭和58年
- (7) 註6に同じ
- (8) 水の江和同「西北九州における曾煙式土器の諸様相」『考古学と地域文化』同志社大学 昭和62年
- (9) 坂田邦洋 「九州の黒曜石一黒曜石の产地推定に関する考古学的研究一」『史学論叢』第13号 別府大学史学研究会 昭和57年  
坂田邦洋 「九州産黒曜石からみた先史時代の交易について(1)」『賀川光夫先生還暦記念論集』昭和57年
- (10) 石川恒太郎 「小林市中山前遺跡調査」『宮崎県文化財調査報告書』第9輯 宮崎県教育委員会 昭和39年
- (11) 田中 康 「こまくりけ遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1) 宮崎県教育委員会 昭和48年
- (12) 北郷泰道 「下の平地下式横穴発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教育委員会 昭和56年
- (13) 昭和60年1月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については永友良典氏より御教示頂く。  
田中 康 「石蓋土壙墓群と地下式横穴の調査」『別冊 考古学ジャーナル』1 ニュー・サイエンス社 昭和60年
- (14) 志戸本次助『小林市史』小林市 昭和41年
- (15) 乙益重隆 「異形鉄器」『成川遺跡』文化庁 昭和49年
- (16) 栗原文藏 「小林市尾中原発見の地下式横穴」『宮崎県文化財調査報告書』第9輯 宮崎県教育委員会 昭和9年

- ⑩ 岩永哲夫 「新田場地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集  
宮崎県教育委員会 昭和53年
- ⑪ 昭和60年2月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については面高哲郎氏より御教示を頂く。
- 面高哲郎 「新田場地下式横穴墓群」『地下式横穴墓から見た古墳時代』宮崎考古学会・鹿児島考古学会 昭和61年
- ⑫ 昭和60年2月に小林市教育委員会が調査主体となり実施した。報告書未刊。詳細については永友良典氏より御教示頂く。
- 田中 茂 「石蓋土礫墓群と地下式横穴の調査」『別冊 考古学ジャーナル』1  
ニュー・サイエンス社 昭和60年
- ⑬ 平成元年12月から2年2月まで小林市教育委員会が調査主体となり実施した。2年3月に概要報告書が刊行される予定。詳細については長友郁子氏より御教示頂く。
- ⑭ 面高哲郎 「城山地下式横穴墓群」『地下式横穴墓から見た古墳時代』宮崎考古学会・鹿児島考古学会 昭和61年
- ⑮ 藤岡謙二郎「日向國」『古代日本の交通路IV』大明堂 昭和54年
- ⑯ 茂山 繁 「竹山遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)宮崎県教育委員会 昭和48年
- ⑰ 平部頼南 「日向地誌」明治17年

## 第Ⅱ章 水落遺跡A地区の調査

### 第1節 発掘調査の概要

水落遺跡（小林市大字細野字水落・脇ノ上）は、宮崎市の北北西約40kmの標高208m（比高10m）の丘陵上に位置する。

県営出の山地区圃場整備事業に伴って県教育委員会が昭和63年12月19日から26日まで試掘調査を行った結果、遺跡の存在が確認されたので、小林市教育委員会が調査主体となり、A地区の4000m<sup>2</sup>とB地区の10000m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。一次調査のA地区は平成元年9月4日から10月30日まで、二次調査のB地区は11月7日から12月27日まで行われた。

A地区からは中世の掘立柱建物7棟・溝状造構6本が検出され、縄文時代晩期の黒色磨研土器・打製石器、中世の青磁・白磁・土師器などが出土した。掘立柱建物の内訳は庇付きの2間×5間が1棟、庇付きの2間×3間が2棟、2間×3間が3棟、2間×2間が1棟である。主軸は東西方向と南北方向である。

B地区からは弥生時代後期の竪穴住居7軒、中世の溝状造構5本、江戸時代の墓43基が検出され、弥生時代後期の上器・中世の上器（東播系の片口鉢）・六道錢（寛永通宝）などが出土した。特に7号住居から出土した重弧文長頸壺は注目される。また近世墓としてまとまって43基も調査されたのは注目される。

### 第2節 包含層の状態

当遺跡の基本層序は、第I層が褐色土層（Hue 7.5YR 4/4・耕作上）、第II層が黒色土層（7.5YR 2/1）、第III層が暗褐色土層（7.5YR 3/4）、第IV層が黄褐色（7.5YR 8/8・アカホヤ層）、第V層が橙色土層（7.5YR 6/8）である。東区は第II層が残存しており、第III層で造構検出を行った。西区は第III層が水田耕作によって既に削平されており、第IV層で造構検出を行った。遺物は第III層から出土する。

### 第3節 中世の造構と遺物

中世の造構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状造構4本、西側で溝状造構が2本が検出された。中世の青磁片・白磁片・土師器片などが出土した。

#### (1) 掘立柱建物

掘立柱建物は7棟はA地区の東区（b-10, 11, c-11, D-11~13）で検出された。7棟の内訳は庇付き3棟と庇なしの4棟である。4号掘立柱建物の庇付きの2間×5間が最大規模であるが、2間×3間が標準的な規模である。1号掘立柱建物は南北

方向が主軸であり、東面庇付きの2間×3間である。2号掘立柱建物は南北方向が主軸であり、西面庇付きの2間×3間である。3号掘立柱建物は南北方向が主軸の2間×3間である。4号は掘立柱建物は東西方向が主軸であり、南面庇付きの2間×5間である。5号掘立柱建物は東西方向が主軸の2間×3間である。6号掘立柱建物は2間×2間である。7号掘立柱建物は東西方向が主軸の2間×3間である。1号掘立柱建物は3号溝状造構を切っている。7号掘立柱建物は5号溝状造構によって切られている。1号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、4号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土した。

## (2) 溝状造構

西区の北部(a-6・7)の1号溝状造構と2号溝状造構、東区の北部(b-10、c-d-13・14)の3~6号溝状造構の計6本が検出された。すべてほぼ南北方向に走っている。5号溝状造構は4号溝状造構に切られ、両者は6号溝状造構によって切られている。4号溝状造構は幅40~50cm、深さ2~15cmであるのに対して、6号溝状造構は幅50~60cm、深さ10~15cmで床面に長さ55~65cm、幅35~45cm、深さ3~6cmの梢円形プランのくぼみが連続している。

## 第4節 小結

A地区からは中世の掘立柱建物7棟、溝状造構6本が検出され、縄文時代晩期の黒色磨研上器、打製石器、中世の青磁、白磁、土師器などが出土した。当地区的最盛期は中世の時期である。

中世の造構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状造構4本、西区で溝状造構2本が検出された。切りあいによる新旧関係は、3号溝状造構→1号掘立柱建物、7号掘立柱建物→5号溝状造構、5号溝状造構→4号溝状造構→6号溝状造構であるのが、次の4時期に分かれる。I期は2号掘立柱建物・5号掘立柱建物・7号掘立柱建物・3号溝状造構、II期は1号掘立柱建物・3号掘立柱建物・6号掘立柱建物・5号溝状造構、III期は4号掘立柱建物・4号溝状造構、IV期は6号溝状造構である。1号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、4号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土しているので、II期が鎌倉期に、III期が室町期に比定される。一時期の3棟の掘立柱建物の単位が抽出されたが、細かい時期編年については本報告で行いたい。



第2図 水落遺跡A・B地区全体図



第3図 A地区全体図

## 第Ⅲ章 水落遺跡B地区の調査

### 第1節 調査区の設定と概要

水落遺跡B地区は、同遺跡A地点と市道を挟んだ南側に位置している。標高は約207m、面積は約10,000cm<sup>2</sup>である。発掘調査は井の山地区県営圃場整備事業に伴って、平成元年11月7日～12月27日まで小林市教育委員会により発掘調査が行われた。グリッドの設定はA地区と基準を同一にし、A地区的グリッドをB地区にまで拡張する形で行った。

本遺跡は調査着手前は、長い期間水田であったため、表土層から遺物包含層までの厚さが40～100cmあるので重機により表土剥ぎを行い、その後遺構精査を行った。遺構検出面はアカホヤ層の上層の褐色土層である。

検出された遺構はB地区東端部分を中心として、弥生時代の住居跡7軒、中世以降と考えられる溝状遺構5条、柱穴群、近世墓43基他である。このうち弥生時代の住居後は、ベッド状遺構を持つもの（SA3）や、方形プランで風の当らない東側に張り出しを持つもの（SA1）、掘り込みが褐色土の上の黒色土までしか達しておらず、遺物集中部分から住居跡の形が推測されるもの（SA4、SA7）などバラエティーに富んでいる。この時代の主な遺物としては、長頸壺や線刻土器等がある。溝状遺構は5条ともA地区との間の市道を越えてA地区付近まで伸びていたと考えられる。遺物としては溝状遺構内からではないが東播系の片口鉢が出土している。近世墓に関しては約450m<sup>2</sup>の狭い範囲から43基が集中して見つかった。このうち17基から17体の人骨が出土し、六道錢として寛永通宝を持つものも11基ある。

### 第2節 層序

第4図で示した土層図は、B地区中央部分で確認したもの的一部である。調査区内の各所で層の厚さなどが若干異なる所もあるが、基本的な層序としては全て同一である。

#### 第I層：灰色軟質土

現在の水田の耕作土である。粘性は少なくパサバサしている。第II層との境界がはっきりしておりその部分に水中の鉄分の沈殿と思われる赤褐色硬質土が2～3cmの厚さで入っている。

#### 第II層：漆黒色軟質土

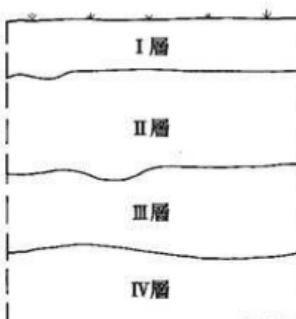
この層の下部が遺物包含層である。やや粘性を持ち、細かいハミスを疊らに含んでいる。第III層との境ははっきりしない。

#### 第III層：暗褐色硬質土

やや粘性を持ち硬い。第II層から第IV層への漸層である。当遺跡での遺構検出面である。

#### 第IV層：橙色硬質土

純粋なアカホヤ層である。プライマリイな状態で厚く堆積している。



第4図 基本層序図

### 第3節 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 窪穴住居

3号住居は調査区の東端に位置している。直徑6.7mの円形プランで、四本の柱で囲まれた方形プランの床面より約15cm高くベッド状遺構がめぐっている。柱穴の直徑は約30cm~40cm、深さ約38~56cmである。東側は一部削平されているが、遺構検出面からベッド状遺構の床面までの深さは約22cm~338cmである。焼土は検出されなかった。住居内の土器は西側部分に集中している。

#### (2) 遺物

第8図1・2で示した土器は、『免田式』重弧文長頸壺であるが、同一固体ではない。

1は、頸部の段差が顕著ではなく口縁が外反する。頸部内面には指頭圧痕がよく残っており、口縁部内面は刷毛目が施されている。外面の調整は口唇部がヨコナデであるが、それ以外はヘラミガキである。胎土の色調は外面がにぶい褐色(7・5YR 5/4)、橙色(7・5YR 6/6)、内面は橙色(7・5YR 6/6)である。2は胴部である。『免田式』重弧文長頸壺の文様としては典型的なものである。胴部上半はミガキを加えてから重弧文を施文しているが、その下の横方向の沈線を切っている縦方向の沈線は、上の重弧文と全て対応するものではない。胴下半の調整は刷毛目である。胴上半と胴下半が作る角度は程やかで長胴化しており、底部は外面が橙色(7・5YR 7/6)、にぶい黄橙色(10YR 7/4)である。

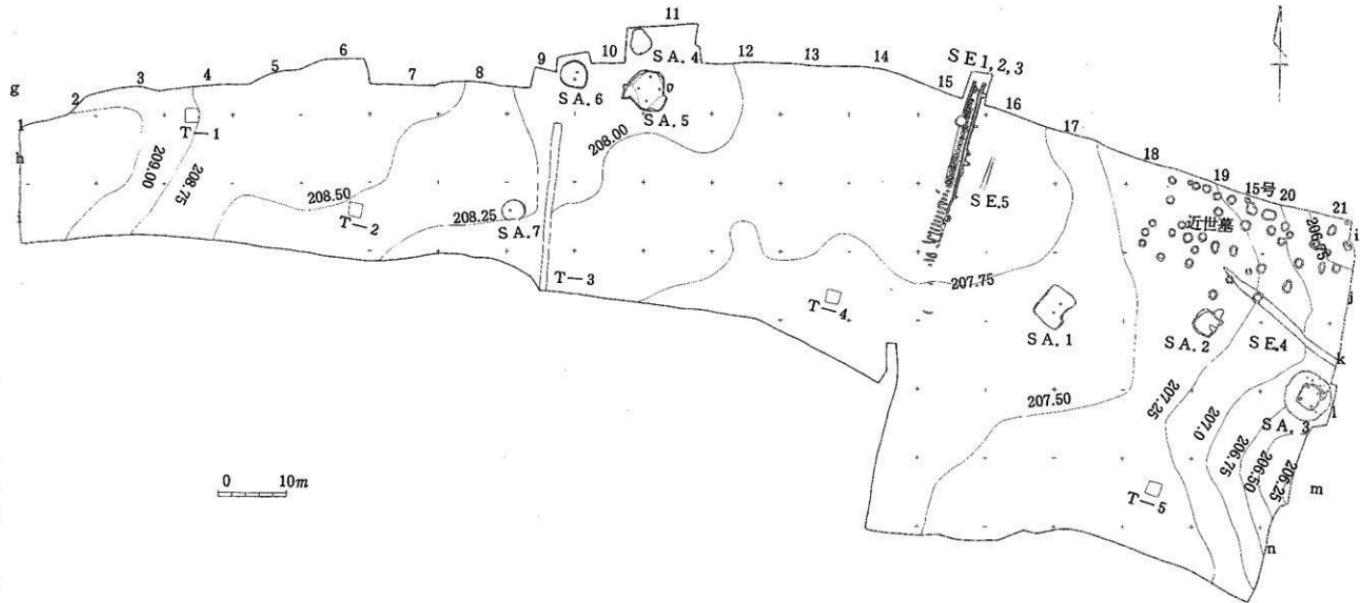
### 第4節 中世の遺構と遺物

#### (1) 溝状遺構

溝は、調査区の東側部分に集中しており、南北方向に4本(SE 1~3・5)、東西南向1本(SE 4)検出された。このうちSE 2は、A区のSE 6と同じように幅約1.1mの溝の床面に幅約60cm、長さ約45~55cm、深さ約8cmの梢円形状の窪みが連続している。またその両側には幅約40cm、深さ約10cmの溝(SE 1・3)が一部伴う。いずれの溝状遺構にも供伴する遺物はない。

#### (2) 遺物

遺構には伴わないが、k-14区で東播系片口鉢が1点出土している。特徴としては、口縁端部を上下に軽く抓み出しており、体部内面と口縁端部の接点は棱をなしているが、体部外面と口縁端部外面の接点は丸く仕上げている。体部は直線的で内面はヨコナデにより調整されており仕上げナデは施されていないが、底部内面にはハケ目を施している。底面は半分欠如しているが、静止糸切りと考えられる。包量は口径24.0cm、器高8.3cmである。



第5図 水落遺跡B地区遺物分布図 (600分の1)

## 第5節 近世の遺構と遺物

### (1) 近世墓

調査区の北東部の10m×45mの範囲に43基検出された。円形プランが34基、方形プランが9基の合計43基である。方形プランの長軸はほとんど南北方向であるが、円形プランのものに関しては真円に近い状態をしているので現在のところ長軸方向は不明である。また、43基中17基から17体の人骨が出上した。

当遺跡の近世墓群の中でも特に大きな規模を誇っている15号墳は方形プランで長軸200cm、短軸132cm、深さ144cmである。人骨の出土状況からすると方形プランであるが、被葬者は座棺により葬られたようである。

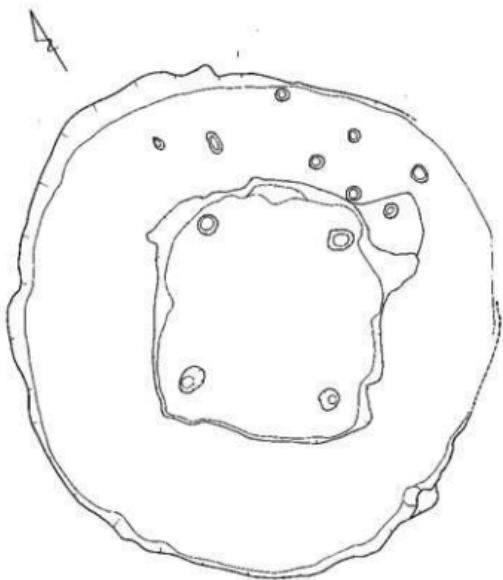
なお人骨に関しては長崎大学医学部第2解剖学教室の松下孝幸助教授に依頼し、長崎大学にて調査中である。

## (2) 遺物

副葬品としては六道銭としての寛永通宝が11基から90枚出土し、外には棺の釘と推定される鉄器が27点出土している。また、棺材が5点、陶磁器片が4点出土した。

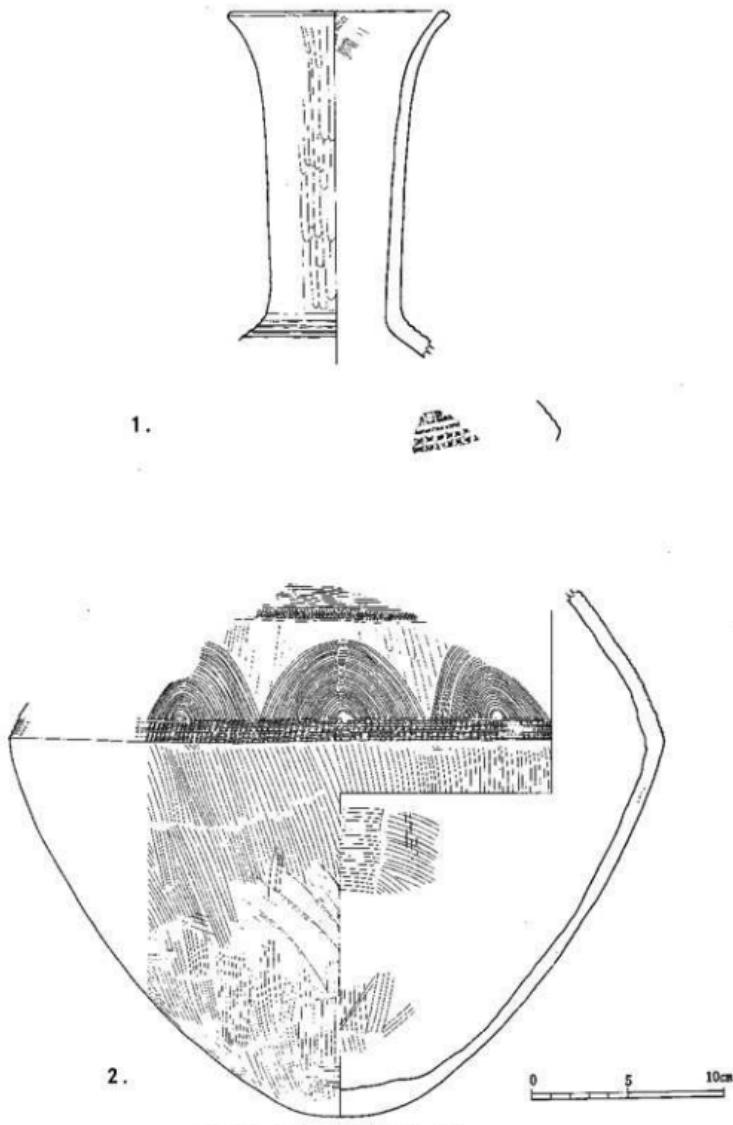
第1表 土器觀察表

測定番号	測定長	測定部	内 部		外 部		備考
			前	後	左	右	
第7回 1A7	1	舌 口唇部-舌根部 舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部	口唇部-舌根部 舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部	舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部	舌尖部 舌尖部	舌尖部 舌尖部	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部
第7回 1A7	2	舌 (7倍)	舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部	舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部	舌尖部 舌尖部	舌尖部 舌尖部	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌根部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部
第7回 1A7	3	舌 口唇部-舌側面 舌側面-舌尖部	口唇部-舌側面 舌側面-舌尖部	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部
第7回 1A7	4	舌 舌側面-舌尖部	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部
第7回 1A7	5	舌 舌側面-舌尖部	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部
第7回 1A7	6	舌 舌側面-舌尖部	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面	1.5-2.0cm、(左)直頭 舌側面-舌尖部 舌尖部-舌側面 舌側面-舌尖部 舌尖部

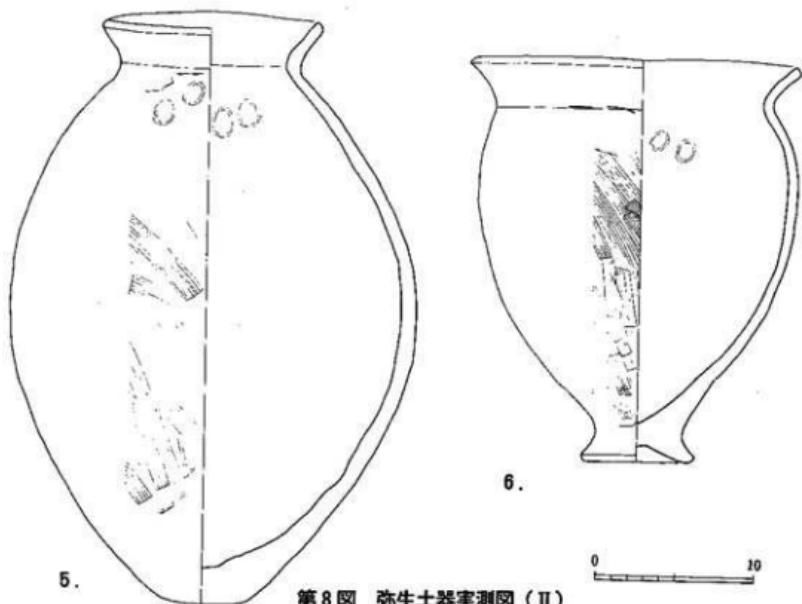
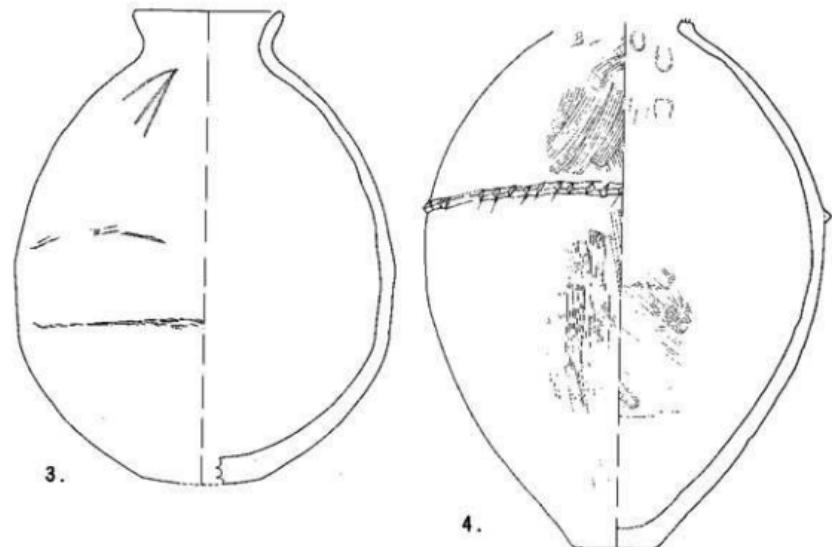


0 1 m

第6図 積穴住居実測図



第7図 弥生土器実測図(1)



第8図 弥生土器実測図（II）

## 第6節 小 結

第6図で示したS A 3は、ベッド状遺構を持つことなどから弥生時代後期に位置付けられる。S A 7から出土している重弧文土器は、いわゆる『免田式』重弧文長頸壺で、大淀川上流での住居跡からの出土は当遺跡以外では、城ヶ尾跡（高城町）と様屋敷遺跡（高崎町）のみであり、時期については弥生時代後期後葉に比定されている。当遺跡における『免田式』重弧文長頸壺は、その形態から弥生時代の終末期に相当すると思われるが、共伴すると考えられる図6の壺は宮崎県平野部においては弥生時代後期後半となり時間的一致をみない。しかし当遺跡は山間部なので占い形式が時期が下がっても残る可能性があるのと、小林市としては弥生時代のまとまった資料の出十が今回が初めてなので当遺跡の資料をよく検討し、各住居の前後関係及び土器の前後関係、土器の編年については、本報告の中で行いたい。

東播系中世須恵器である片口鉢は、形態から森田稔氏の編年の神出第Ⅱ期—須恵器Ⅳ期第2段階に相当するので12世紀後半から13世紀初頭に比定される。片口鉢の出土状況から片口鉢とS E 1～3は伴う可能性があるので、S E 1～3は12世紀後半から13世紀初頭を中心とする時期に比定される。

近世墓からは六道銭として寛永通宝が出土していることから、時期としては寛永通宝が鋳造された1636年以降であることは確実であろう。

## 註

- (1) 長津宗重・寺師雄二「城ヶ尾跡」「高城町文化財調査報告書第1集」  
平成元年
- (2) 北郷泰道 「様屋敷遺跡」「高崎町文化財調査報告書第2集」平成2年刊行予定
- (3) 森田 稔 「東播系中世須恵器の生産と流通」「中近世土器の基礎研究」Ⅲ  
昭和62年

## 第IV章 まとめ

水落遺跡は、縄文時代晚期の黒色磨研土器、弥生時代後期の土器、中世の青磁、白磁、東播系の片口鉢などが出土し、弥生時代後期の竪穴住居7軒、中世の掘立柱建物7軒、溝状造構10本、江戸時代の近世墓43基などが検出された。当遺跡は縄文時代晚期から江戸時代末まで営まれているが、生活空間としての最盛期はB地区の弥生時代後期とA地区の中世の時期である。

弥生時代後期の竪穴住居7軒の内訳は、円形プラン3軒・方形プラン2軒・不定形プラン2軒である。円形プランの3号住居は4本柱で囲まれた方形部分が周囲の床面より一段低くなっている、周囲はベッド状造構を尾している。方形プランの1号住居は東から内側に張り出し部があり、入口部としての機能が想定される。これらの竪穴住居の時期は上げ底の甕や重弧文土器から後期後葉～末葉に比定される。今まで県内で調査されたこの時期の集落は日向型間仕切り住居を主体とする集落ばかりであったが、当遺跡は日向型間仕切り住居で構成されない集落として注目される。円形プランの7号住居から出土した重弧文土器は長胴化し、丸底気味なので、西健一郎氏分類の第4型式cに相当し、後期後葉の新段階に比定される。市内では細野出土のものが知られており、7号住居出土のものと同じタイプである。県内では竪穴住居から重弧文土器が出土した例としては、城ヶ尾遺跡（高城町）<sup>(1)</sup>と様屋敷遺跡（高崎町）<sup>(2)</sup>のみがあるだけであり、本来は大荻遺跡（野尻町）<sup>(3)</sup>の土墳墓の例のように供献土器として製作・使用されている。

中世の造構はA地区の東区で掘立柱建物7棟・溝状造構4本、西区で溝状造構2本、B地区で溝状造構4本が検出された。A地区は造構の切りあいによって、次の4時期に分かれる。Ⅰ期は2号掘立柱建物・5号掘立柱建物・7号掘立柱建物・3号溝状造構、Ⅱ期は1号掘立柱建物・3号掘立柱建物・6号掘立柱建物・5号溝状造構、Ⅲ期は4号掘立柱建物・4号溝状造構、Ⅳ期は6号溝状造構である。1号掘立柱建物の柱穴から青磁片が、4号掘立柱建物の柱穴から白磁片が出土しているので、Ⅱ期が鎌倉期に、Ⅲ期が室町期に比定される。B地区的S E 1～3は東播系の片口鉢から12世紀後半～13世紀初めに比定されており、A地区的Ⅱ期に相当する。当遺跡では一時期3棟の掘立柱建物の単位が抽出されたが、県内の中世の集落としては宮崎学園都市遺跡群の熊野原遺跡C地区（宮崎市）<sup>(4)</sup>・草地東遺跡（宮崎市）<sup>(5)</sup>・前原北遺跡（宮崎市）<sup>(6)</sup>などが調査され、庇のついた大型の掘立柱建物とそれに付随する数軒の小型の掘立柱建物を一つの単位として考えられている。またA地区的6号溝状造構やB地区的S E 2に見られるように溝内に精円形の浅い掘りこみを多数有する溝状造構は、県内では前畠遺跡（えびの市）<sup>(7)</sup>・熊野原遺跡C地区（宮崎市）<sup>(8)</sup>・大岩田村ノ前遺跡<sup>(9)</sup>・松原地区第II遺跡<sup>(10)</sup>・桜山・群元地区遺跡（都城市）<sup>(11)</sup>などで検出され、溝状造構の性格としては道・樹列・塀の基礎・「木馬道」などが想定されているが、不明な点が多い。

今回の面的な調査によって弥生時代後期の集落の構成と規模及び中世の集落の単位が確認されたのは大きな成果であった。細かい土器編年、住居変遷などの問題点については本報告書の中で明らかにしていきたい。

### 註

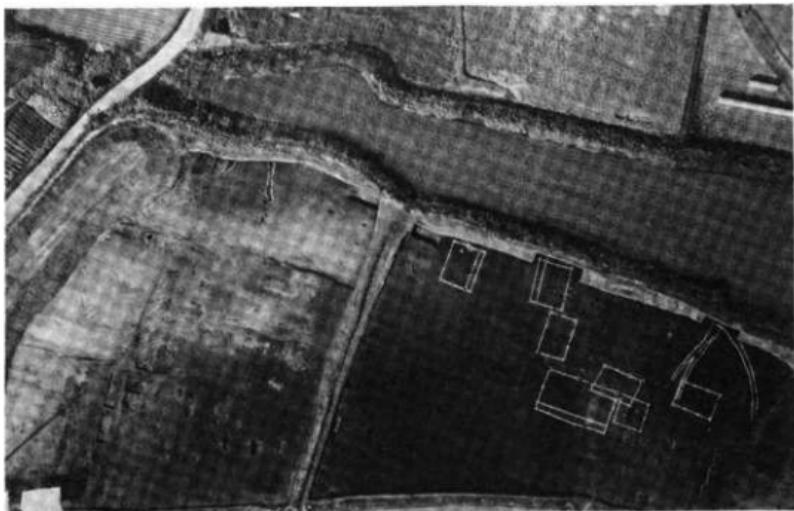
- (1) 長津宗重「日向型簡仕切り住居研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 昭和60年
- (2) 西健一郎「重弧文長頸壺」「弥生文化の研究」4 雄山閣 昭和62年
- (3) 潤之口伝九郎・樋渡正男「日向の重弧文土器」『古代文化』第14巻第10号 昭和18年
- (4) 長津宗重・寺師雄二「城ヶ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第1集 高城町教育委員会 平成元年
- (5) 昭和63年7月～8月に高崎町が調査主体となり実施した。詳細については北郷泰道氏に御教示を頂く。本年度、『高崎町文化財調査報告書』第2集に掲載。
- (6) 石川恒太郎「大荻遺跡(1)」「特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」宮崎県教育委員会 昭和50年
- (7) 面高哲郎「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 昭和60年
- (8) 日高孝治「堂地東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 昭和60年
- (9) 北郷泰道「前原北遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会 昭和63年
- (10) 日高孝治「日向の古代～中世～学園都市遺跡群を中心としてー」「えとのす」第32号 昭和62年
- (11) 北郷泰道「前畑遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(3)』宮崎県教育委員会 昭和55年
- (12) 矢部喜多夫「松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」『都城市文化財調査報告書』第7集 都城市教育委員会 平成元年
- (13) 近藤 協・谷口武範「桿山・郡元地区遺跡の発掘調査について」「平成元年度 埋蔵文化財担当専門職員等研修会資料」宮崎県教育委員会 平成2年
- (14) 北郷泰道「東大寺虹梁と日向ー神格化の構造ー」「えとのす」第32号 新日本教育図書 昭和62年



図版 1

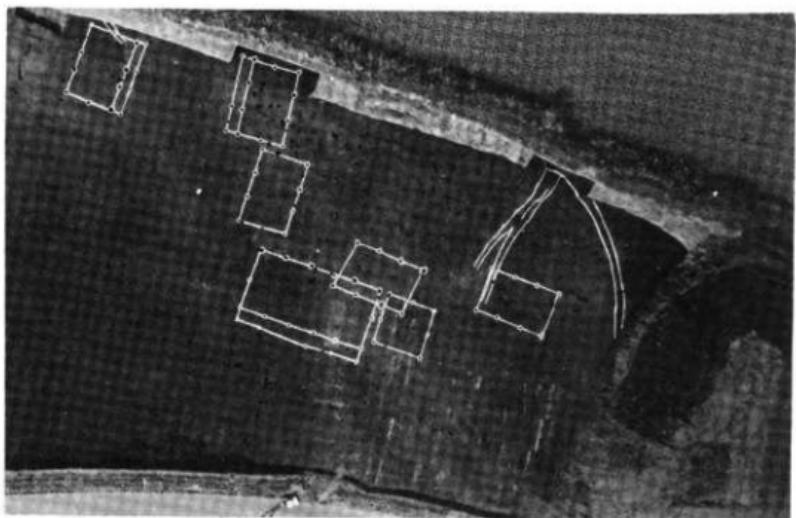


水落遺跡 A 地区遠景（西から）

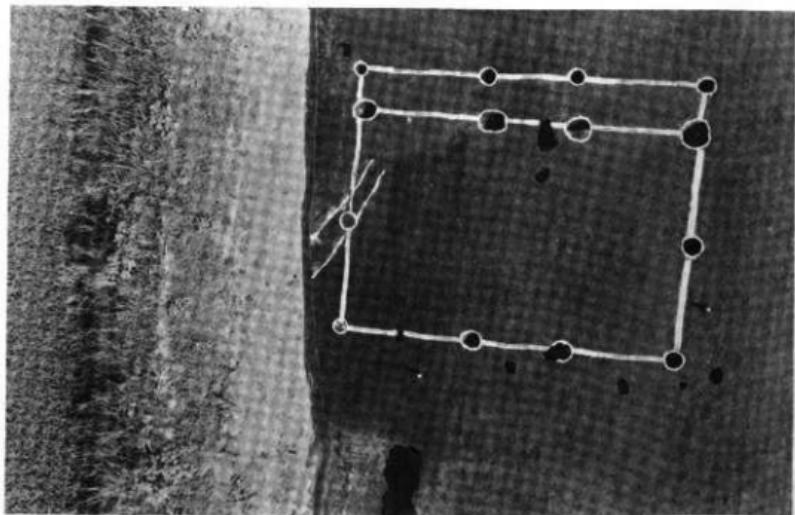


A 地区全 景

图 版 2

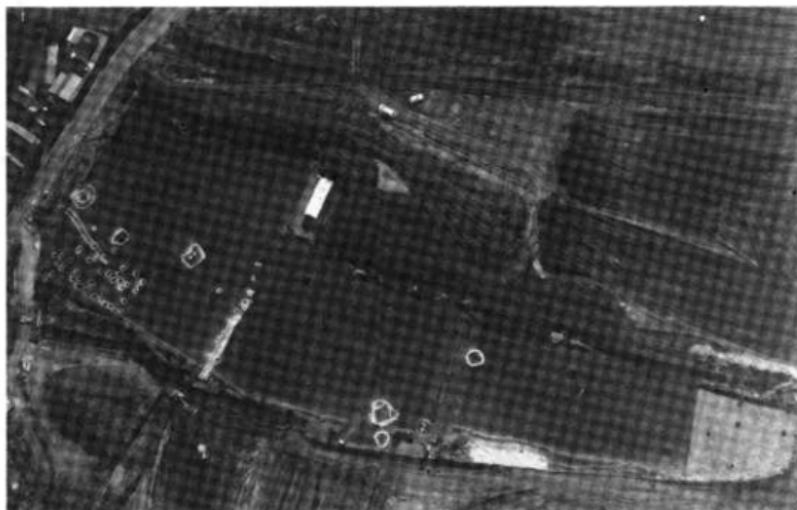


A地区据立柱建物群

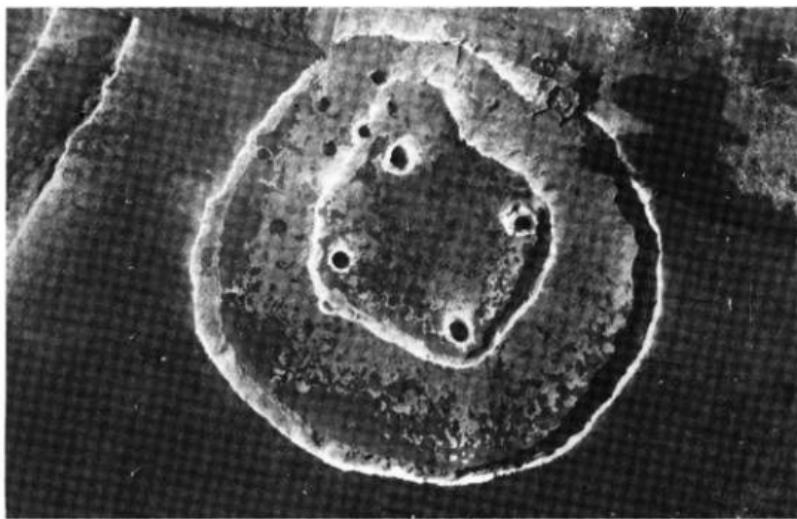


A地区 1号据立柱建物

図版 3

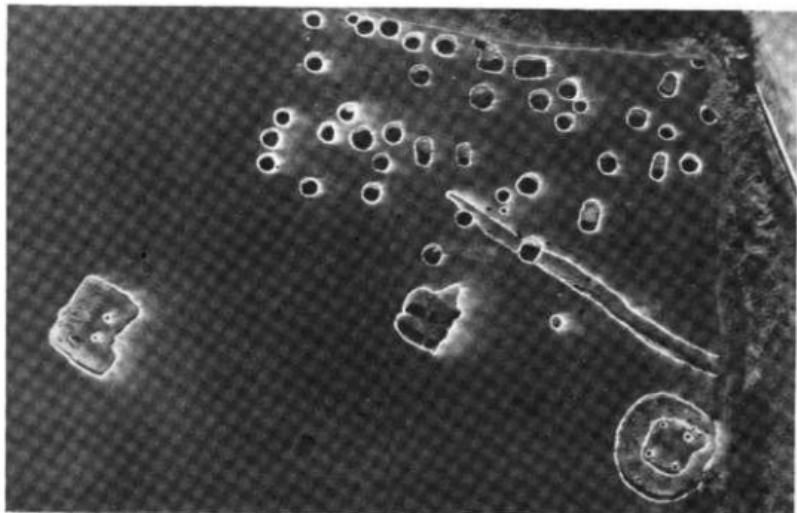


水落遺跡 B 地区 全 景

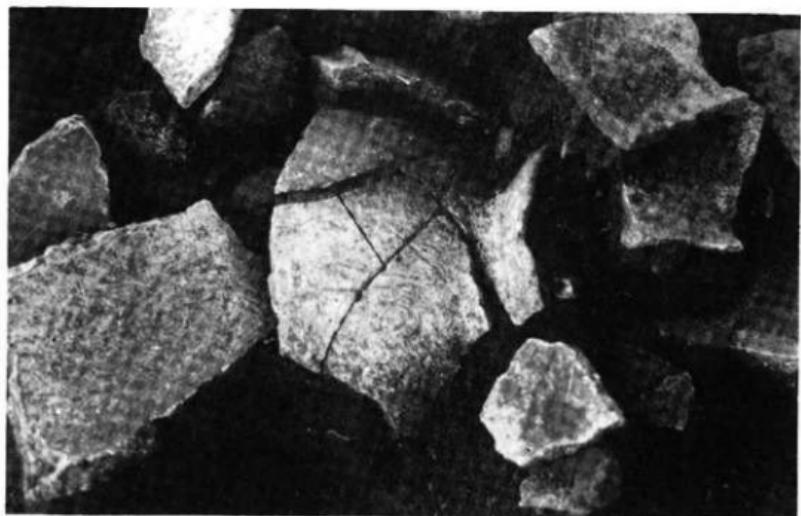


B 地区 3 号 竪 穴 住 居

図版 4



B 地区 近世墓群全景



B 地区 線刻土器出土状況

小林市文化財調査報告書 第1集

## 水 落 遺 跡

発行年月日 平成2年3月31日

編集発行 小林市教育委員会

印 刷 小 蘭 印 刷